

花ちゃん・オー君・モンタ博士のわくわくドキドキ国立てくてく

国立第七小学校 平成25年7月9日 NO.29

オー君 「ねえ、モンタ博士。昆虫採集
（こんちゅうさいしゅう）に行こうよ。」

モンタ博士「うん、行こう、行こう。花ちゃんも
さそって行こう。」

オー君 「ねえねえ、花ちゃん。昆虫採集に行こう。」

花ちゃん 「うーん。昆虫採集か・・・。」

モンタ博士「どうしたの。元気がないね・・・。」

花ちゃん 「私、植物採集は好きだけど、昆虫採集は・・・
どうも、あまり気がすすまないの。」

オー君 「どうしてだい。何かやんでいることでもあるの。」

花ちゃん 「モンタ博士、チョウや虫をとることは、
わるいことじゃないの？」

オー君 「野山にさいている植物をとるのと同じだよ。
悪いことじゃないよ。」

モンタ博士「むやみやたらにとったりころしたりするのは、
もちろんよくないことだと思うね。でもね、
オー君は、とった虫をきれいな標本にして
いるよね。いつかは生き物は必ず死んでしまう。
標本づくりは、生き物に『第二のいのち』を
あたえるようなものなのさ。」

花ちゃん 「ふーん。『第二のいのち』か・・・なるほど。」

モンタ博士「でもね、モンタ博士がこう言ったからといって、すぐその通りだと無理にき
めつけなくていいよ。いろいろと考えることはいいことだよ。何度もい
うけれど、『昆虫採集は科学（かがく）のはじめの一歩』なんだよ。」



昆虫学者の矢嶋稔さん（元多摩動物公園の園長）のお話より…

ぜひ、お父さん・お母さん方に読んでほしいのですが…。

生き物について、命を大事にしよう！とか、自然を大切に！とかよく聞かれる言葉であるが、よく考えてみると、これは大人の側からの論理があまりにも幅をきかせているのではないだろうか。ある程度成長した大人にとっては、その人なりの価値観があり、生命観とかができていて当然である。しかし、幼児や小学生などの子供は動く物に対して反応するのであって、ありの行列があると、踏んでみたり、邪魔をしてみたりすることが多く見られる。なんと残酷なことをするのかという人がいる。しかし、それは、生きていくということがはっきりと分かっていないからではないかと考えられる。つまり、その行動はなんとなく面白いからなのである。でも、何か人間の心の中には、人格形成の初期にそういう反応をしてみたいという、結果的に大人がみると何と残酷なというのが、それは、人間が通らなければならない関門であると考えられる。虫を殺してはいけないよ、草花を取ってはいけないよと言って、手をこまねいて、手を出さないようにしてきたのは、それは間違いであると断言して良いと思う。なぜならば、それと取り組みあったり、飼ってみたり、だけど、死んでしまった。あるいは、遊びとして、トンボの羽をとって飛ばしてみた、だけど、必ず心の奥底には罪悪感が残り、悪いことをしてしまったというものが残るはずである。そういうものが子供の心の中にちゃんと刻み込まれているのである。ぼくの世話の仕方が悪かったからだとか、こんどからはむやみに虫をころさないようにしようとか。そういうものが心のどこかに絶対に、感性のどこかに必ず響いているのである。そういう経験を通してきてこそ、生命というもの、虫や草花などの生き物というものがわかってくるのではないだろうか。

人間は食物を取る、排泄をする、大きくなる。好きな人ができて恋愛する。お互いのコミュニケーションが生き物同士でおこなう。そのようなお互いのいろいろなことが、生き物同士で、人間同士で必要であるといえる。他の生き物との触れ合いを通して、初めて人間というものがわかってくるのではないだろうか。それを自然を守ろう、命を大切にというだけで、何もさせない、アプローチさせないということが、またそういう見方、風潮が現在までの間に、見られたのではないと思う。高度経済成長をしてきた日本と物質至上主義の世界。金銭でなにもかも解決できるという誤った考え、また、公害問題についての正しい認識不足のために、自然保護、生命尊重の考えが、あまりにも言葉が先行しすぎてしまい、浅薄で皮相的になってしまったことなど。心の中に空いた空洞がそのままの形で大きくなり、身体だけが大きくなっていったという現実がある。しかし、生命観、自然観というものを培うために経験がないから、いくら本とか、映像とかで、自然を守ろう、命を大切にといっても、何が大切なのか、何を守るのがよいかという判断基準、能力がないのではないだろうか。そのような考え方や行動があまりにも多すぎたのではないだろうか。

NHK テレビ番組「謎解き昆虫記」の一節より